

作見の井戸 さくみのいど



深谷地区にある『作見の井戸』では、毎年1月上旬に井戸の水位を測り、その年の作況を占っています。



印の付いた専用の鉄の棒を差し入れます。



濡れた位置と印で水位を確認します。

殿舎の前に建つ石碑は『作見の井戸』の保存会が昭和55年に建立したもので、この井戸の縁起を記しています。それによると、この井戸は、寛文9年(1669年)に相馬藩主の命で小高から移住した佐藤氏が190年間使用した井戸で、干満の差が激しく「寒の節(二十四節気の小寒の日)から立春の前日までの約30日間」の水量で稲の作況の予知ができることとされ、天明の頃(1700年代後期)には『作見の井戸』の呼称があったと伝わります。昭和期には冷害や凶作を的確に予知したことから、神秘の井戸としてメディアにも取り上げられました。かつては自然のままの井戸でしたが、現在のような形に改修され、有志が水神を祀ったことも石碑には記されています。満水になると井戸の前にある『豊年の池』に水が流れ出るつくりになっています。しめ縄張りなどは、保存会の会員で井戸の土地の所有者でもある村山家が行っています。



川井智洋さん
JAふくしま未来
飯館営農センター長

『作見の井戸』は、毎年、JAふくしま未来飯館総合支店の支店長はじめ職員が、お神酒をあげて参拝し、水位を測っています。昭和9年から震災前までの記録と、作況指数を合わせてグラフ化したことがありますが、過去の記録は見事に重なっていました。かつてはその年の水位を会報に掲載し、冷害に備える年は、水田の水張りなど警戒を呼び掛けていたほどです。そのように、昭和期まではビタッと合っていたのですが、次第にずれが生じ、原因は分からないまま合致しない年も出てきました。地元の人の間では、自然災害などによる湧水の流れの変化ではないかと話題になりますが、特に震災後は水位の上がない年が多くなりました。しかしそれでもやっぱり、寒の入り過ぎると、水位を見に来る方がいらつしゃいますね。我々も、お正月の参拝と水位の測定をこれからも続けていきます。変化はあっても、よい方に捉えていければと思います。米作りに関わる者として、この井戸を大切にしていきたいと考えています。

ちょっと昔の 小正月

小正月とは、1月15日を中心とした行事のこと。元日を中心とした大正月の正月行事の締めくくりと位置づける地方もあります。村の正月行事はまだまだあつて、新たに嫁が来た家に行つて新嫁に炭をつける「墨祝儀」(ユーモアを込めたコミュニケーション?)や、女性が丸1日休み男性が家事をする「女の正月」といった行事もあったそうです。当時の様子もつと知りたくありませんね。

田植え踊り

1月13日の笠揃い(朝から衣装と道具を揃えて踊る)に始まり、神社に踊りを奉納してから、14・15・16日の3日間は各戸を回って踊り、最後に笠ぬぎ(笠はずしと呼ぶ地区もあります)をして、宴を催し終わりました。これも地区によって、流れが大きく異なります。回る順序の決まっている地区もありました。田植え踊りは、中断や復活を繰り返しながら、18の集落に伝わってきました。稲作の過程を表現する踊りで、五穀豊穰、豊年満作の願いが込められています。

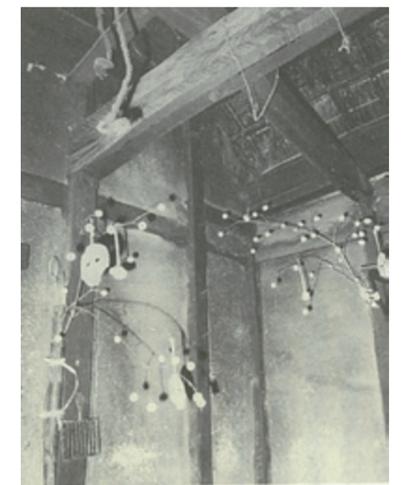


左の上の写真は雪の上で神社に奉納する比叡地区の田植え踊り。(飯館村デジタルアーカイブより) その下の写真は松塚地区の田植え踊りの行列。行列は「道行(みちゆき)」とも呼ばれました。(飯館村史より)



だんごさし

団子の木(ミズノキ・ミズギ)に餅団子や大黒煎餅を付けて、歳徳神や各部屋、かまど、風呂場などに飾り、豊作を願いました。仏壇には十六団子といって少し大きな餅団子を16個つけてさしました。それらは20日の朝に「稲刈り」と言って取り外します。団子を茹でた煮汁は、虫除けになるとして、家の土台の四隅にかけたり飲んだりする所もありました。「いたて希望の里学園」や「まていの里のこども園」では、村民の皆さんの協力をいただきながら、毎年だんごさしを行い飾っています。(下は昨年の様子)



上の写真は飯櫃地区で撮影された昔のだんごさし。家のあちこちの柱に飾ったそうです。だんごさしに合わせて「イナボ」(左の写真)をつくる地区もありました。ヨモギを餅団子の煮汁につけ、粉をかからんでつくるそうです。